慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エンゲルスのロオドベルトス批評（一）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.10 (1922. 10) ,p.1441(67)- 1447(73)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19221001-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大學文學部教授 川合貞一 著

現代哲學への途

定價金貳圓八拾錢 送料拾貳錢

■四六版布裝帙箱入四百二十餘頁■

哲學の理解には、生みの惱みを伴はねばならない。「たゞ生みの惱みを經るならば、その思想の背後には必ず生命が宿つてゐる。哲學の理解とは、決して流行の思潮を追ふことではない。眞の哲學は「哲學すること」に始まる。本書に集めた論稿は、著者が現代哲學に關して、盡した一々の努力の記錄である。自家の課題を自家に於て解決することは一私事に過ぎない。それは、主觀的價値しかないと云へるかも知れない。けれども現代哲學を理解する一つの途として考へるならば、個人的體驗は決して、單なる私事に止まらない。故に、若し著者がこれまでの歩んだ徑路を深く索ねるならば、それに依つて必ず現代哲學を理解する上に、指針と暗示とが與へられるであらう。現代の哲學を研究せんとする人々は、速に本書を一讀せられんことを……

最新刊

發行所 東京神田區神保町四 電話神田四〇〇二番 振替東京一四七九六番 東光閣書店

雜錄

エンゲルスのロオドベルトス批評（一）

小泉信三

エンゲルスはロオドベルトス自身及び其學徒がロオドベルトスを以て餘剩價値說の眞發見者なりとし、マルクスの學說は剽竊に出でたるものと公言するのを默視することが出來なかつた。資本論第二卷の序文及び「哲學の貧困」新版の序文（一八八四年）に於て彼れは此批評の謬妄を明にしようとして居る。其要點を概括すれば、マルクスは其餘剩價値論を立つるに方つてロオドベルトスに斯の如き說あるを全く知らざりしこと、ロオドベルトスの餘剩價値說は年代の上より見れば毫も新說を以て目すべからざること、及びマルクスの學說とロオドベルトスの學說との間には、學說其者としても、該學說の全體系上に於ける位置に就ても重要の相違あることが是である。今左に掲げるところは「哲學の貧困」序文の極めて自由な拔譯である。マルクス自身のロオドベルトス批評（餘剩價値學說史第二卷第一冊）は別の機會に之を論ずる豫定である。

近世社會主義は、如何なる流派のものたるを問はず、苟もそのブルジョワ經濟學から出發する限り殆ど皆リカルドオの價値學說に結付いてゐる。リカルドオが一八一七年、其「原理」の卷首に揭げた二つの命題、即ち（一）各商品の價値は、その生產に要せられたる勞働量に依てのみ決せらる、（二）全社會的勞働の生產物は地主（地代）資本家（利潤）及び勞働者（賃銀）なる三階級の間に分配せらるといふ命題は、既に一八二一年以來英吉利に於て社會主義的結論を引き來る爲めに利用せられてゐる許りでなく、其中にはマルクスの「資本論」が出る迄は之を凌駕するものがなかつた程の犀利透徹なる議論もあつたのであるが、併し其事に就て論ずるのは別の機會に讓る。さういふ譯であるから、ロオドベルト

スが一八四二年其"Zur Erkenntnis"で上記の二命題から自分で社會主義的結論を演繹し來つても、それは當時獨逸人としてはたしかに著しい一進歩ではあるが、併し精々獨逸に取つての新發見たるに止まるものである。此種のリカルドオ學說の應用が決して新しいものでないことは、同じやうな妄想に陷ゐつてゐたブルドンに對して。マルクスが其「哲學の貧困」の中でホジスキンの經濟學、トムソンの分配論、エドモンツの實踐的道德的及び政治的經濟、プレエの勞働の不當侵害と勞働の救濟等の書目を擧げて之を示してゐる。當時マルクスは足未だ大英博物館（ブリチシュミューゼアム）圖書館の床を踏まず、巴里とブルユッセルの圖書館と、我輩の藏書及び手抄の外には、僅かに一八四五年に自分と一緒に試みた六週間の英吉利旅行中、マンチエスタアで買ひ集めることの出來た書籍を通讀してゐたに過ぎないから、右書目中に擧げられてゐる諸書は、四十年代の當時には、決して今日のやうに手に入れ難いものではなかつたのである。それにも拘らず、是等の諸書がロオドベルトスに知られてゐなかつたとすれば、それは正しく彼れの普魯西的眼界狹隘の罪である。併し彼れの愛する普魯西國內に於ても、彼れは悠々としてはゐられなかつた筈である。一八五九年にマルクスの「經濟學批評第一冊」が伯林で出た。其中の第四十頁にはリカルドオに對する經濟學者の反對論の第二條として

「一生產物の交換價値が、それに含まるゝ勞働時間に等しきものならば、一勞働日の交換價値は其生產物に等しい。換言すれば、賃銀は勞働の生產物に等しくなければならぬ。ところが事實は正反對である」と記し、之に對する脚註に「此の經濟學者の側からリカルドオに提出せら

れた反對論は、後に社會主義者の側で之を取上げた。公式は理論上正しいものとして、實際が理論と撞着するの廉を以て責められ、ブルジョワ社會は實際に其理論的原則を貫徹すべきことを求められたのである。此方法に於て少くも英吉利社會主義者は、リカルドオの交換價値の公式を經濟學に對して向ける武器としたのである」と記して居る。同じ註の中にマルクスの「哲學の貧困」が擧げてある。此書は當時猶は到處の書肆に就て買ふことが出來たのである。

さういふ譯であるから、ロオドベルトスはその一八四二年の發見が、果して眞に新發見であつたか何うかを確かめる機會が充分あつたのである。ところがそれをせずに、彼れは彼の發見を比類なきものと信じ、マルクスも亦其結論を、ロオドベルトス自身と同樣に、單獨にリカルドオから演繹し得た筈だと云ふことに曾て思ひ及ばないのである。そんな筈はない。マルクスは彼れを「盜んだ」のだ。此結論が少なくも猶ほロオドベルトスに於て見るが如き粗雜なる形式に於ては、彼等二人よりも遙かに以前に、既に英吉利に於て發表せられてゐるといふ事を確かめ得る爲め、有ゆる機會を彼れに提供した、その同じマルクスが彼れを盜んだのだ！

リカルドオの學說の最も簡單な應用は、上記の如きものであるが、此は多くの場合に於て、遙かにリカルドオ以上に出づる餘剩價値の起原と本質とに關する洞察に導いた。ロオドベルトスの場合も其一例である。併し彼れが其先人の未だ言つて居らぬ全く新しい事は、何處にも言つて居らぬといふ點は之を措いても、彼れの記述は、其先人の記述と同樣に、勞働、資本、價値等の諸概念を、其內容を吟味することなく、經濟學者から傳へられた皮相的な形の儘で採用

してゐるといふ疵病を持つてゐる。これが爲めに彼れは單に自ら其將來の發展の途を全く杜絶した許りでなく、直ちにユウトピヤに通ずる途を開いたのである。

上記のリカルドオ學說の利用、即ち社會的生產物の總量は唯一の眞生產者たる勞働者に屬すべきものなりとの結論は、直ちに共產主義に導くものである。然るに此應用は、上記マルクスの文句にも暗示せられてゐるやうに、經濟學上形式上謬つて居る。これは單に經濟に對する道義の適用に外ならぬからである。ブルジョワ經濟學の法則に從へば、生產物の大部分はそれを造つた勞働者には屬さない。そこでそれは不當である、當さに然るべからざることであると云へば、それは差當り經濟とは全く關係のない事である。吾々は此の經濟的事實が吾々の道念と抵觸するといふに過ぎぬ。さればマルクスは未だ曾て其の共產主義的要求の根據を此には求めないで、吾人の目前に於て日々益々完了に近づきつゝある資本的生產方法の必然的崩壞に之を求めたのである。彼れは一個の單純なる事實として餘剩價値は支拂はれざる勞働を以て成ると言つたに過ぎぬのである。

リカルドオの價値決定法は、特に善良なる市民の正義感情に訴へる一面を有つてゐる。商品價値の尺度は勞働なることが一度認識されゝば、善良なる市民の感情は、この正義の根本則を名義上には承認しながら、事實上では常に恬然顧みざるの觀ある世の中の不當不義の爲めに傷けられざるを得ない。大生產と機械との競爭の爲めに、日々其勞働の價値が失はれて行く小市民小生產者は、特に生產物の完全に其勞働價値に應じて相交換せらるゝ社會に憧憬せざるを得ない。換言すれば、商品生產の特殊の一法則のみが完全に行はれて、而かも抑も其法則の行はれ得べき諸條件、即ち商品生產及び更に資本的生產の自餘諸法則の欠けてゐる一社會に憧憬せざるを得ないのである。

此の小市民のユウトピヤに對しては、マルクスが既にプルドン及びジョン・グレエ駁論中に殘すところなく批評を加へてゐるから、我輩は此處には、特にロオドバルトスの特色の存する點に對して數言を加へるに止めて置けばいゝのである。

前述の通りロオドベルトスは、傳來の經濟學上の諸定義を、經濟學者に依て傳へられたる儘の形で採用して、全く之を吟味しようとは試みてゐない。彼に取つては價値は「一物の自餘の諸物に對する分量上の相當(Geltung)であつて、此相當は尺度として考へられたるもの」である。此の、穩かに云つて、甚だ不的確なる定義は吾々に精々價値は凡そ如何なる外觀を呈するかの觀念を與へはするが、價値の何たるかは全く之を示さない。然しロオドベルトスが吾々に價値に就て告げ得るところは、之を以て盡きてゐるから、彼れが價値以外に存する價値の尺度を求めるのは當然である。即ち彼れはアドルフ・ワグネル氏をして感嘆せしめたその抽象的思考力を以て、三十頁に亘つて使用價値と交換價値を滅茶滅茶に混亂せしめた揚句、眞の價値尺度なるものはなくて、吾人は尺度代用物を以て滿足しなければならぬものであるといふ結論に到達する。斯の如き代用尺度には勞働を以て之に充てることが出來るけれども、それは事實上既に行はれてゐるのでもよし、之を保障するやうな仕組を設けるのでもよし、兎に角同量勞働者の生產物と相交換せられる場合に限るのである。されば第一章は擧げて商品には勞働の費されあ

ること、勞働の外何物も費されあらざること、又その何故に然るかを說明する爲めに充てられてゐるにも拘らず、價値と勞働との間には何等客觀的關係はないのである。

勞働も亦彼れは經濟學者の場合に於けると同じ形の儘之を承認して居る。否なそれすらもして居らぬといふのは、勞働の强度の差が兩三語を以て指示せられてゐる外には、勞働は極く一般的に、費用をなすもの、價値を測定するものとして引用せられて、それが標準的なる社會的平均條件の下に於て投下せられてゐるか否かは顧みられて居らぬからである。生產者が一日にして造られ得る生產物の製作に十日を費してゐるか否か、最良の道具を用ゐて居るか、最惡の道具を用ゐて居るか、その勞働時間を社會的に必要な貨物に對して社會的に必要な數量に於て投じてゐるか、或は全く不要の貨物を作るか、それとも需要ある貨物を需要以上又は需要以下に作るか。凡て是等の點に干しては全く論ぜらるゝところがない。勞働は勞働である。同じ勞働の生產物は同じ勞働の生產物と交換されなければならぬのである。平生は、その時宜に適すると否とを問はず、直ぐに國民的見地に立つて、一般的社會的望樓の高みから個々生產者の狀態を概觀しようとするロオドベルトスが、此場合には特に努めて之を避けてゐる。而して其譯けは彼が其書の第一行から直ちに勞働貨幣のユウトピヤに直進するからで、而して苟も勞働の價値形成力の吟味は、如何なるものも皆此航路の障害となるからである。此處では彼れの本能はその抽象的思考力よりも力强いのである。

然らば商品をして例外なく、其勞働價値に應じて相交換せられしめる方法はと云へば、ロオドベルトスの場合にはそれは甚だ簡單である。同じ派に屬する自餘のユウトピストはグレエからプルドンに至る迄、皆な少くも經濟的問題は經濟的方法で、商品交換當事者其人の行爲に依て、解決しようとして苦心してゐるが、ロオドベルトスは善良なる普魯西人として直ちに之を國家に訴へる。國家の命令が改革を命ずるのである。

斯やうにして價値（少くも一部分生產物の價値）を制定した上で、國家は其勞働貨幣を發行し、工業資本家にそれで貸附をすると、資本家はそれで勞働者に賃銀を支拂ひ、勞働者は收得した勞働紙幣で生產物を買ひ、斯くして紙幣は其の最初の出發點に還流するといふのである。此事が如何に美事に行はれるかはロオドベルトス自身の言葉に聽かなければならぬ。（未完）

ウヰリアム・モリスの共產主義（三、完）

加田哲二

八

次に共產主義社會における勞働の狀態を見る。資本主義の賃銀勞働はすべて嫌惡すべきもので、その勞働の主要動機は經濟的强制である。勞働に對する本來の刺激は確かに必要そのものである。乍然、勞働に伴ふ感情の方面を見ると、精力行使の快感がある。勞働發達の經過を見ても、もし人爲的並に特權的强制が存在しないものと假定すれば、勞働の快樂は、その苦痛に比して增加して來る。例へば自然の狀態における馬は驅馳するを喜び、犬は狩獵を好む。普